欧州文化都市制度

欧州市民としてのアイデンティティ確立と文化振興の一手法

(財) 自治体国際化協会　CLAIR REPORT NUMBER 091 (SEPTEMBER 19, 1994)

はじめに

欧州文化都市制度

欧州文化首都アントワープ‘９３

欧州地域文化振興政策

「欧州文化都市」及び「欧州文化月間」開催都市一覧

財団法人自治体国際化協会
(パリ事務所)

目　　次

はじめに ····· 1

第１章　欧州文化都市制度 ····· 3
　第１節　イベントの目的 ····· 3
　　１　当初のアイデア ····· 3
　　Ａ　イベント内容 ····· 3
　　Ｂ　手続 ····· 4
　　２　発展 ····· 4
　　３　ＥＣ非加盟国への拡大 ····· 5
　　４　選定基準 ····· 5
　第２節　ＥＣ助成金 ····· 6
　　１　助成方式 ····· 6
　　Ａ　手続 ····· 6
　　Ｂ　監査 ····· 7
　　２　不十分な財政援助 ····· 8

第２章　欧州文化首都アントワープ‘９３ ····· 9
　第１節　組織 ····· 9
　　１　組織構成 ····· 9
　　２　施設 ····· 10
　　Ａ　既存施設 ····· 10
　　Ｂ　施設整備 ····· 14
　第２節　開催イベント ····· 17
　　１　展示・展覧会 ····· 17
　　２　公演 ····· 18
　　３　シンポジウム ····· 19
　　４　日本からの参加者によるイベント ····· 19
　第３節　財政 ····· 19
　　１　予算 ····· 19
　　２　多様な資金分担 ····· 20
　　Ａ　公共機関 ····· 20
　　Ｂ　スポンサー募集 ····· 20

第３章　欧州地域文化振興政策 ····· 22
　第１節　欧州評議会 ····· 22
　　１　活動領域 ····· 22
　　Ａ　任務 ····· 22
　　Ｂ　加盟国 ····· 23

2　方針……23
A　宣言……23
B　結果……24
第２節　欧州連合ＥＵ……24
1　活動の領域……24
A　独自の使命……24
B　欧州評議会との協力……25
2　諸機関……25
A　ＥＣ閣僚理事会……26
B　欧州議会……26

第４章　「欧州文化都市」及び「欧州文化月間」開催都市紹介……27
1　「欧州文化都市」開催都市……28
１９８５年　アテネ……28
１９８６年　フィレンツェ……29
１９８７年　アムステルダム……29
１９８８年　ベルリン……30
１９８９年　パリ……30
１９９０年　グラスゴー……31
１９９１年　ダブリン……31
１９９２年　マドリッド……32
１９９３年　アントワープ……33
１９９４年　リスボン……35
１９９５年　ルクセンブルク……35
１９９６年　コペンハーゲン……36
１９９７年　テッサロニキ……37
１９９８年　ストックホルム……37
１９９９年　ワイマール……38
2　「欧州文化月間」開催都市……39
１９９２年　クラクフ……39
１９９３年　グラーツ……39
１９９４年　ブダペスト……40
１９９５年　リュブリャナ……40
１９９５年　ニコシア……41

用語解説……42

参考文献……43

はじめに

欧州連合条約（マーストリヒト条約）が1993年11月に発効したことに伴い、政治統合を目指す欧州連合（EU）が名目上設立された。今後、金融政策の統一、単一通貨の発行等経済・通貨面での統合も進められるものと思われるが、同時に北欧3国やオーストリアの加盟が実現した後、旧東欧諸国の加盟も視野に入ってこよう。

こうした欧州の真の統合を実現するため、ECは欧州市民の欧州に対するアイデンティティの確立、すなわち自分の所属する欧州に対して、国家に対するのと同じ様にアイデンティティをより深く認識できるようにすることを主目的として、新しい欧州の都市文化振興策「欧州文化都市」政策を実施している。

1993年に、「欧州文化都市」に選定されたのは、日本に馴染みのある物語「フランダースの犬（ウィーダOuida作）」の舞台として知られるベルギーのアントワープであった。この「欧州文化都市」と呼ばれる政策は、1985年、当時ギリシャの文化大臣であったメリナ・メルクーリ Melina Mercouri 女史（ギリシャ初の社会主義政権の文化大臣としてギリシャの伝統遺産の保護に力を注いだが、1955年カンヌ映画祭主演女優賞を受賞した元映画女優でもある。）が提唱したもので、「EC加盟国の数ある歴史と伝統のある都市の中から、1年間主役となる都市を選び、その都市に秘められた遺産、財産、歴史などを広く一般に公開させることにより、EC加盟国の諸民族の関心をその都市文化に集中させ、結果的に親近感を抱くようにするべきである。」というもので、加盟国全ての文化担当大臣の賛同を獲得した。

第一回は1985年で、この年の「欧州文化都市」に選定されたのは、ギリシャのアテネであった。以後、イタリアのフィレンツェ、続いてオランダのアムステルダムが、それぞれEC閣僚理事会の選定によって、1年間「欧州文化都市」となった。開催都市は、それぞれの伝統を公開することにより、通常よりも多くの観光客が訪れ、文化観光というべきものを発展させることになった。これらの都市に続いて選定されたのはドイツのベルリンで、それまでとは違った欧州文化に関心を呼ぶことにより、この文化運動は新たな展開を見せ、異なる欧州文化を持つ都市間の対話を可能にした。

1年間にわたる政策「欧州文化都市」が成功を収め、開催都市がその魅力を増大させることに刺激されて、期間は短いものの、新たに別の都市で「文化月間」を開催する政策が決定され、通年開催と月間開催の2つの軸となる都市の間で連携を組織する可能性も生まれた。

今日では、この開催都市の選定は、「民主主義、複数政党主義、法治国家体制」（EC閣僚理事会編「1990年 5月18日EC閣僚理事会に参集した文化担当大臣会議による『欧州文化都市』の今後の開催都市選定、及び『欧州文化月間』の特別行事に関する決定」）という原則を認めこれを尊重している国である限りにおいては、中欧及び東

欧の都市でも可能としている。

「欧州文化都市」の政策について、EC閣僚理事会が当初考えた内容は、今日では発展を遂げているため、まずその状況を紹介し（第１章）、次いで具体的ケースとして1993年のアントワープに関してその現状を概観し（第２章）、この政策とECの地域文化振興政策との関連（第３章）を見ることとした。そして最後に「欧州文化都市」及び「欧州文化月間」開催都市を文化の側面を中心に簡単に紹介した（第４章）。

この「欧州文化都市」という名称については、ECの閣僚理事会における公式文書では「欧州文化都市（la ville européenne de la culture）」が用いられるが、アントワープのように国の首都でない場合にも、その年の欧州における文化に関する「主役都市」という意味を込めて「欧州文化首都（la capitale culturelle de l'Europe）」と言う名称が使用されているようであるので注意を要する。本レポートでも「欧州文化首都」という表現を一部使ったのは以上の理由によるものである。

なお、本レポートは、当協会パリ当事務所石川善朗上席調査役、渡辺武所長補佐及びValérie ROBERT調査助手の3人が1993年12月アントワープを訪れ実態を調査し、松田聰所長の指導の下、Valérie ROBERTが原案を作成し、石川善朗及び渡辺武が加筆調整し取りまとめたものである。

第１章　欧州文化都市制度

「欧州文化都市（la ville européenne de la culture）」制度とは、ECの、今では欧州連合（EU: l'Union européenne）の後援を受けて行われる文化イベントである。閣僚理事会（le Conseil des ministres）が、その目的の大枠を決めており（第１節）、開催都市は欧州議会（le Parlement européen）の議決を経て、EU委員会（la Commission）から助成金を受け取ることができるシステムになっている（第２節）。

第1節　イベントの目的

このイベント計画が誕生したのは、EUの一機関たる閣僚理事会においてであった。当初は一都市を文化面で奨励するのが狙いであったが、毎年の新たな経験が諸種の改良や新機軸を生みだし、これまでの歳月の間に、このイベントは発展を遂げた。かくして、当初のアイデア（１）から選定対象都市と目的が発展し（２）、EU非加盟国ばかりか中欧・東欧諸国にも枠が拡大されるとともに、行事そのものの概念規定にもより大きな変化が生じた。その結果、今では将来における更なる変化が予想され（３）、閣僚理事会もそのため、今後の開催都市としての立候補手続きを簡素化する目的で、最近になって、開催都市選定基準を発表したのである（４）。

１　当初のアイデア

1985年当時、ギリシャの文化大臣であったメリナ・メルクーリ女史（Melina Mercouri）は、EC加盟国の一都市にその住民の関心を集中させ、その都市が自らの伝統を公開するというイベントの提案を行った。1985年には出身国の都市アテネが、自らの文化的な財産を活用する都市の第1号となった。そして、このアテネの経験を通じて、行事内容（A）と手続（B）が定められることになった。

A　イベント内容

このイベントは、都市文化の歴史的形成と現代における発展から見て、それぞれの都市が他の都市と共通する要素を持つこと、さらにこのイベントは各都市の多様性がもたらした個性的な豊かさを併せ持つことを広く知らしめるということを目的としている。また、イベントは、EC加盟国の諸民族が親近感を抱くようになることが目的で

あって、広範な欧州文化が親近性を持つようになることがその目的とされる。

また、通年開催の選定を受けた都市やその地方、更には所属する国の文化を、欧州の人々に紹介するものでなければならない。他方このイベントは、他のEC加盟国の文化活動に舞台を提供することもできるが、その場合には、なによりもまず当該地方の住民が恩恵を享受することになる。さらにまた、開催都市は、「欧州文化都市」を通年開催することになった以上、広範な独特の文化的側面とそれに関連する諸々のテーマを前面に押し出して、その価値を表現することも可能である。

こうして1985年のアテネから1987年のアムステルダムまで、「欧州文化都市」は、都市とその伝統、そしてその都市を中心とする地方を、広く人々に紹介する役割を果たした。

B　手続

原則として、「欧州文化都市」開催都市に選定されるのは、一暦年につき一都市だけである。

選定を求める都市は、選定権を持つ閣僚理事会に立候補を届け出なければならない。そして選定にあたっては、イベントの適切な準備が行われるよう、少なくとも2年前に正式決定されることになっている。

次に「欧州文化都市」開催都市の属する国の政府は、国内においてイベントの開催や財政措置に責任を持つ機関を決めることになる。また、他のEU加盟国に準備の進行状況やその実現状況について情報を提供しなければならない。「欧州文化都市」について広範囲な宣伝活動を行うため、可能な限り協力措置を取るのがEC加盟国の任務とされたからである。加盟国の文化担当大臣が、可能な限り開会式に出席するのはこのためである。さらに、1985年から、欧州のEC非加盟国や、場合によっては欧州以外の諸国もイベントに協力することが考えられた。

2　発展

1988年のベルリンでの開催は、イベント内容だけでなくその目的についても変化をもたらした。ベルリンは、その都市としての伝統を広く公開するだけに止まらず、多くの外国都市を招き、多様性と交流を旗印としてイベントを展開したのである。こうして、多くの国々、地方、少数民族などがイベントに参加し、催しは優れて豊かで密度濃く、申し分のないものとなった。1988年のベルリンはつまり、欧州大陸の諸々の相異なる文化の間に真の対話を実現するという任務に取り組んだのであった。

ベルリンは、このイベントに新しい方向性を与える場として、特に適切な都市であ

った。事実、第２次大戦後ベルリンは、いくつもの占領地域と諸々の文化を擁した「多文化都市」になっていたのである。

このような「欧州文化都市」開催における変化は、３に述べるようないくつもの構造上の変化を伴った。

3　EC非加盟国への拡大

1985年にギリシャで第1回の「欧州文化都市」が開催され、EC各国について1都市を選定することとされていたので、1996年で「欧州文化都市」が各国で一巡することになる。そこで、1990年の閣僚理事会では、1996年以後は、ECの加盟国のみならず、他の欧州諸国の都市をも、「欧州文化都市」として選定することができることとしたのである。

閣僚理事会はまた、このイベントを開催することに欧州の諸都市が示す並々ならぬ関心の高さを考慮して、「欧州文化都市」とは別に、「民主主義と複数政党主義、そして法治国家体制を原理とする」欧州の一国の一都市を、毎年、「欧州文化月間（le mois culturel européen）」の開催地として選定することを決定した。この新たな「文化月間」イベントは1992年、クラクフ（ポーランド）において初めて開催され、1993年にはグラーツ（オーストリア）で行われた。

「文化月間」は、「欧州文化都市」の規模を縮小するものでは全くなく、また「文化月間」開催都市が当該「月間」に引き続いて年間にわたるイベントを開催するのを妨げるものでもない。「欧州文化都市」開催都市と「欧州文化月間」開催都市とが連携することさえ可能である。

過去の経験から閣僚理事会は、これらの開催都市を持つ国以外のEC加盟国が宣伝活動を一層強化すべきであると認識した上で、1992年以後の開催都市を選定する作業に入ったのであった。

4　選定基準

1992年、閣僚理事会は候補都市により多くの情報を提供しようと、選定に際し考慮する基準を明確にした。それによれば、まず第一に、ある年にEC加盟国の都市を選定すれば、翌年には他の欧州諸国の都市を選定し、また一国の首都を選定すれば、次には地方の都市を選定する。また同様に、地理的にも、2年連続して同一地域に片寄らないよう配慮し、かつそれぞれの都市が独自で行う各種の記念祭の開催年をも考慮することが望ましいというものである。

閣僚理事会はまた、長期的には、通年開催の代わりに「文化月間」を、そしてまた

同一歴年に複数の都市で開催する可能性も排除していない。最終的な方針は、「グラーツにおける欧州1993」の総括会議から出てくるであろうが、この会議はまだ行われていない。ただし、閣僚理事会は既に1992年から、グラーツにおける「文化月間」が第一級の重要性を持つ欧州文化イベントであり、全面的支援に値すると強調している。

第2節　EC助成金

ECは、「欧州文化都市」開催の費用の一部について財政措置を取っているが（1）、この財政援助は開催総予算額に比して少額に留まっている（2）。

1　助成方式

助成金（la subvention）は、欧州議会が議決する予算の中に含まれており（A）、EU委員会の事後監査を受ける。

A　手続

助成金に関する特別な手続きは存在せず、助成金は予算として通常手続きによって議決される。

欧州議会は、監査・認可権を留保した上で予算を議決する権能を持ち、これによって、予算執行以前に、当該予算作成手続の合法性を検査する権能を与えられている。予算執行は1月1日に始まり、同一暦年の12月31日に終了する。そこでEUのすべての機関は、毎年7月1日までに、経費見積明細書を作成しなければならない。そしてEU委員会は、これらの明細書を取りまとめて予算案試案を作成するが、そこにEU委員会としての参考意見を付加する。この参考意見には、様々な対立する意見が示されることもある。

EU委員会は毎年、遅くとも予算執行年前年の9月1日までに、閣僚理事会に予算案を付託しなければならない。つぎに閣僚理事会は予算案を確定して、毎年遅くとも予算執行年前年の10月5日までに、これを欧州議会へ送付する。

予算案の送付から45日以内に、欧州議会は承認または不承認の議決を行う。もし同期間内に予算案に修正を加えることも修正案を提出することもしない場合、予算は最終的に議決されたものとみなされる。欧州議会が修正案を採択するか、もしくは修正を提案した場合には、予算案は閣僚理事会へ送り返される。閣僚理事会が修正案を再修正するための期間として、15日間の余裕が与えられている。閣僚理事会がこの期間内に再修正しなければ、予算は最終的に議決されたものとみなされる。つまりその場

合には、閣僚理事会が欧州議会に、修正案のいずれに対しても再修正を行わず、修正提案のすべてが閣僚理事会によって承認された旨通告したものと見なされるのである。逆に、もし一つないし複数の修正案が、閣僚理事会によって再修正されたり、修正提案が拒否されたり再修正された場合には、修正を受けた予算案が再び欧州議会へ送付され、閣僚理事会はその審議結果を欧州議会に説明することになる。その場合、欧州議会は態度を決定するのに15日間の余裕が与えられていて、閣僚理事会による修正を三たび修正したり拒否したりすることができる。欧州議会がこの期間内に議決を行わない場合には、予算は最終的に議決されたものとみなされる。

欧州議会はまた、予算案を拒否した上で、新たに別の予算案を提案するよう求めることもできる。

ここで留意すべきことは、「欧州文化都市」及び「欧州文化月間」のための助成金は、欧州議会が議決する予算項目に、これらの名前は明示されず、他の諸項目とともに「光輝ある欧州建設のための先進的文化活動に対する奨励措置（Actions d'encouragement aux initiatives culturelles de rayonnement européen）」と題された予算項目の下に一括されているという事実である。つまり助成金の具体的金額は、EC委員会の裁量に委ねられているのである。比較のためにここで、1992年にセビリヤ（スペイン）を対象にして実施された助成金が、金額を明示し、「セビリヤ万国博覧会分担金（Participation à l'exposition universelle de Séville）」という予算項目で現われていることを指摘しておきたい。

EC助成金として受取る金額の決定が非常に遅れるため、開催都市は予算の立案にあたって、EC助成金を当てにすることができない。そればかりか助成金の支払いそのものは、さらに遅れて執行される。したがって、助成金は確かにEU委員会によって執行年度内に支払われるが、それは既に多くの催物が終了し、「欧州文化都市」が既に巨額の費用を支出した後ということになるのである

B　監査

EU委員会は、会計の事後監査（un contrôle a posteriori）を行う。しかし助成金は具体的な使用目的を規定しないで交付されるから、開催都市は開催のために、自由にこれを使用することができる。監査はあくまで、このような方式で供与された助成金について、その使用に違反がないかどうかを調査するだけである。従って、EU委員会は、開催都市が行う使用目的の細目について干渉することができない。

欧州議会は、予算議決の権能を執行するのに必要な情報と文書を要求する権利を有している。したがって欧州議会は、EUの他の機関やEU加盟国などに文書の提出を要求できるのである。ただし現実には、欧州議会がこの権限を行使したことは一度もない。

開催都市は、イベントが終了した後に、財政報告を行う。この財政報告は、EC委員会にも送付されるから、EU助成金が正しく使用されたかどうかを、委員会は確認することができる。

これまでのところ、助成金の使用について、問題は一切発生しておらず、EC委員会からの異議申立ても行われたことがない。現在までに行われた財政報告のすべてについて、EC委員会は常にこれを良しとしてきたのである。

2　不充分な財政援助

イベントのための予算総額に対するECの財政分担率は極めて低い。助成金の金額は、たいてい30万ECU（約3700万円、1ECU=123円換算、以下同様）前後である。1992年には、「欧州文化都市」を開催するに際して、マドリッド（スペイン）が22万ECU（約2700万円）、「欧州文化月間」開催に対してクラクフ（ポーランド）が10万ECU（約1200万円）を交付された。開催都市は、この他、当該市や、県、州、そして文化担当省庁などから助成金を得ているが、公的資金だけでは足りないのでスポンサー（sponsoring）やメセナ（mécénat）の形で民間資金も獲得している。

実例として1991年のダブリン（アイルランド）を挙げれば、510万ポンド（約8億1600万円、1ポンド=160円換算、以下同様）の開催予算に対して、ECからは20万ポンド（約3200万円）が供与されたに過ぎない。その分担率は微々たるものである。これに対し、公共機関からの資金の総額は110万ポンド（約1億7600万円）に上った。ゲーテ協会や英国文化協会など文化団体からの資金援助は70万ポンド（約1億1200万円）に達し、残りの310万ポンド（約4億9600万円）、すなわち総予算額の3分の2は、スポンサー資金であった。

このように「EC」の分担率は、総予算に対して極めて低く、取るに足らないものである。当然ながら、開催都市は一般に、EC助成金の少なさに異議を申し立てており、民間資金による支援がなければ、これらのイベント開催は不可能である。

第２章　欧州文化首都アントワープ‘93

1987年、アントワープ市長は、グラスゴー（イギリス）が1990年の「欧州文化都市」開催都市として選定されたことを知った。グラスゴーは、都市の規模及びその人口から見て、アントワープにほぼ見合うものであったから、市長にこの行事を開催する都市として立候補する考えが芽生えた。ベルギーには、アントワープを除けば、「欧州文化都市」の開催可能な都市が二つしかない。すなわち、リエージュとブリュッセルがそれで、他の都市は、この種の行事を開催するには規模が小さ過ぎるのである。ところがリエージュはこの行事を開催するには施設が不足しており、ブリュッセルはEC委員会を擁することで欧州都市としての性格を既に有していた。そこで、アントワープが「欧州文化都市」に立候補することになった。

立候補に際しては、極めて大まかな企画が提出された。すなわち、画家ヤーコブ・ヨーアルデンス Jacob Joardensの生誕400年祭と連携させた「欧州文化都市」を開催しようというものであった。

1988年、閣僚理事会はアントワープを「欧州文化都市」開催都市に選定したが、その後の経過について、以下にアントワープの組織化過程（第１節）と行事計画（第２節）を検討し、その財政措置についても言及する（第３節）。

第１節　組織

「欧州文化都市」開催のために組織された機関（１）は、アントワープが持つ全ての施設等を活用した（２）。

１　組織構成

アントワープ市はまず、劇場支配人や美術・博物館長、さらに芸術の多様な分野の人々を、それぞれ専門別の作業グループに組織することから始めた。1年後、これら作業グループによってまとめられたイベント計画が出来たが、ジャーナリズムによる酷評を受け、市長はやり直しを決定した。

市長は今度は、イベント企画案作成の権限を、独立した組織に委譲した。この独立組織というのは、「欧州文化都市」のために組織された「アントワープ1993年協会（l'association "Antwerpen 1993"）」という非営利団体で、市、県、州、政府のそれぞれの代表者とアンワープの実業家達によって構成された。市長は、芸術の目的に無理解な上にあまりにも鈍長な官僚流儀に異議を唱えて上述の作業グループを飛び出していた舞台演出家エリック・アントーニス Eric Antonisを再び招いて、企画案を作成させ

た。エリック・アントーニスは、芸術家たちを集めてチームを組織し、イベント計画を作り上げた。

「アントワープ 1993年協会」は、1990年の段階では、この協会の構成員はエリック・アントーニスと一人の女性秘書だけであったが、市はこの二人に絶大な援助を与えた。1993年になると、この協会にフルタイムで所属する職員の数は90人になっていたが、その構成員の選択はエリック・アントーニスに任され、市は人事に干渉することが許されなかった。1993年12月以後は、1994年中頃まで、10人ないし12人がこの協会に残って、最終報告書の作成や、決算事務、記録文書の分類などの仕事に従事し、アントワープの「欧州文化都市」の総括を行うことになっている。

行事内容としては、「文化」という言葉の芒漠さを排して意味を特定化し、応用諸芸術（les arts appliqués）を中心に据え、現代芸術を前面に押し出した。こうしてアントーワープ市は、他に先駆けて芸術を顕彰する舞台（podium à l'art）となる様相を呈することになった。その裏に、1993年以後も、継続して芸術の奨励が行われなければならないという考えが存在していることは言うまでもない。

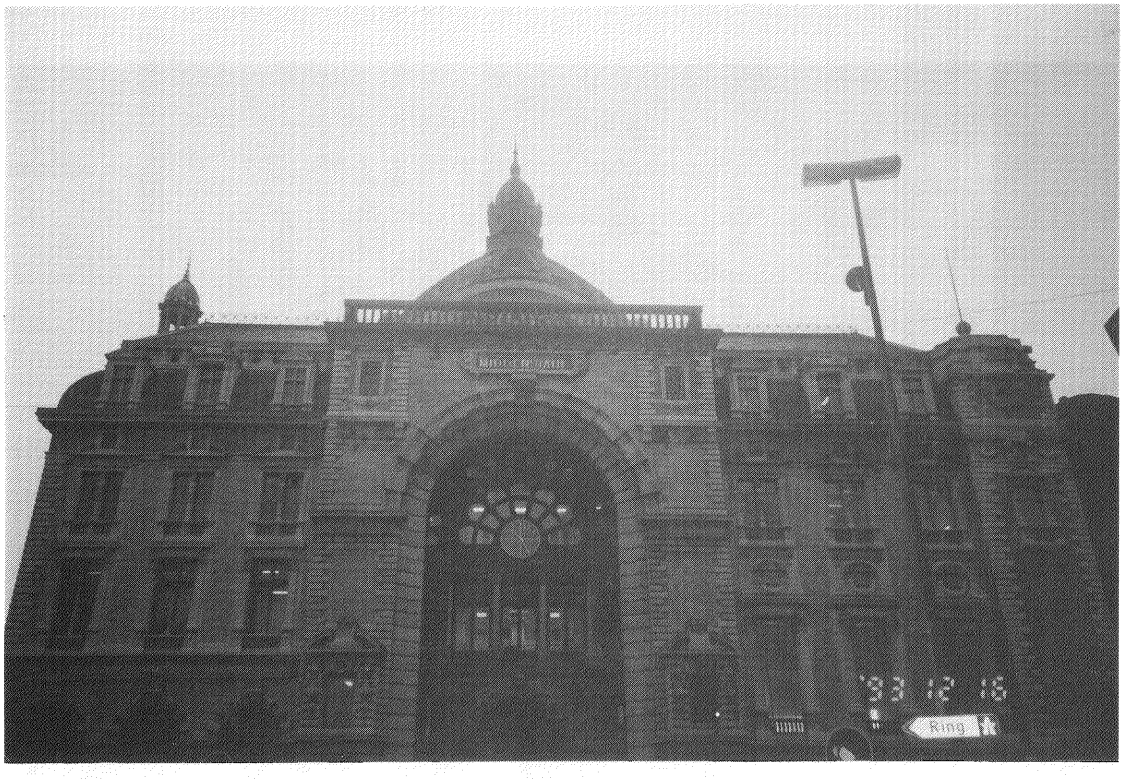
この間に、市民の意見を聞くために、市のあちこちに場所を移して、28回にわたる公開討論会が行われた。イベント計画はそのあと、市議会に提出されて採択され、計画案が採択されると次に、参加芸術家の選定作業が行われることになった。

2　施設

アントワープ市は従前から、それぞれ複数の美術・博物館、劇場、更に文化イベントに使用し得る施設（infrastructure）を擁していたが、これらに加えて、諸々の建物の修復・整備が行われ、「欧州文化都市」のために新たな建設工事も行われた。

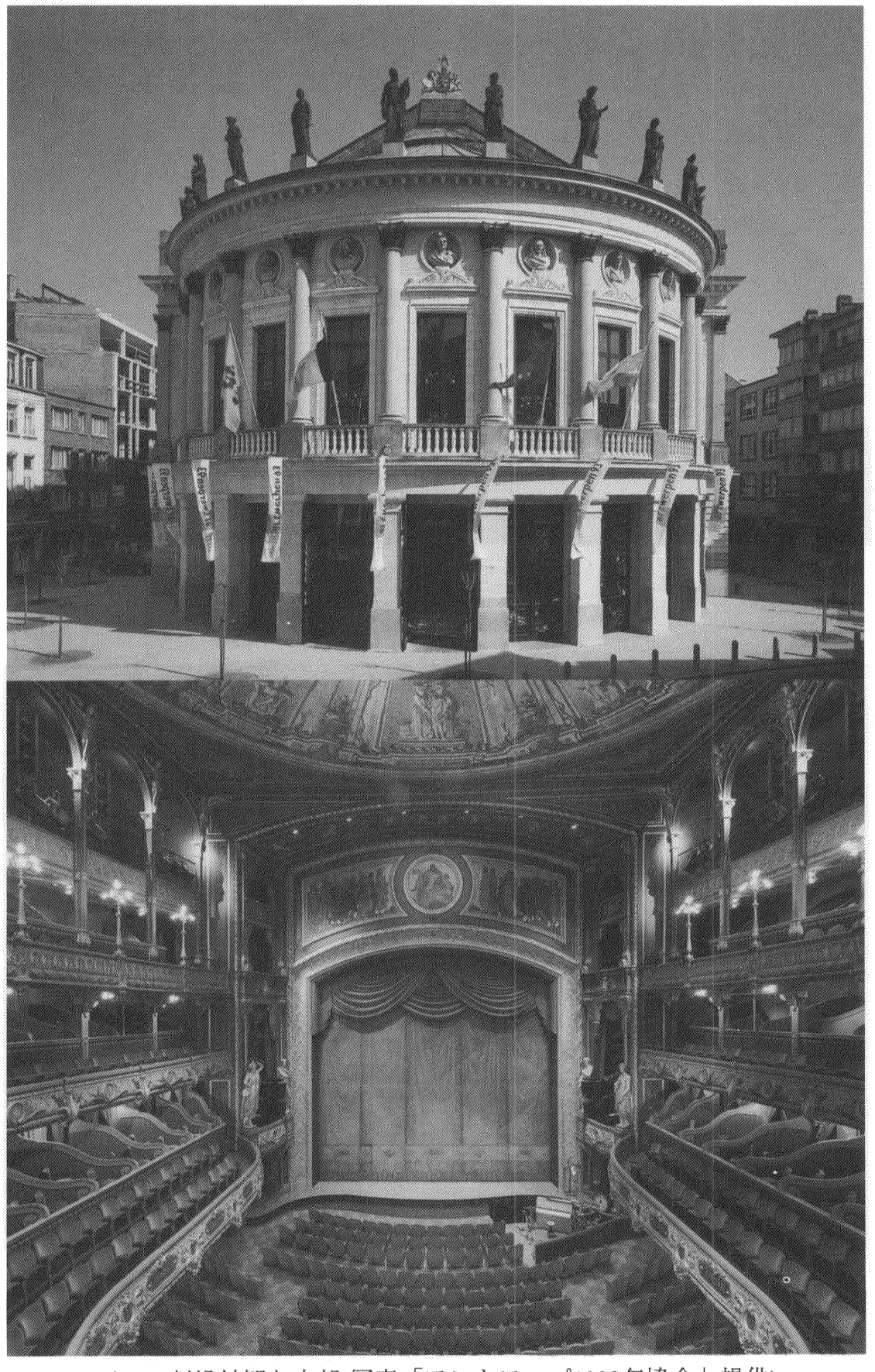
A　既存施設

様々なイベントのために、市内の既存施設が最大限に活用された。他方、大部分が取り壊しの運命にあった建物の修復工事も行われた。こうして、アントワープ中央駅やブルラ劇場（1830年竣工）が修復されて往年の輝きを取り戻したし、名著「フランダースの犬」の主人公である少年が憧れたルーベンスの大作「キリストの降架」のあるベルギー最大のゴシック様式の聖堂ノートル・ダム大聖堂も修復された。修復工事のラッシュは、司教館や諸々の教会堂、国立銀行、更には私有の建物などにも及んだ。3年間にわたってアントワープ市民は、足場組みと建築工事に日々付き合わされたのである。ミッデルヘイム野外彫刻美術館は、従来の展示を模様替えするとともに、1993年以後収蔵の新たな作品群を展示した。



アントワープ中央駅外観

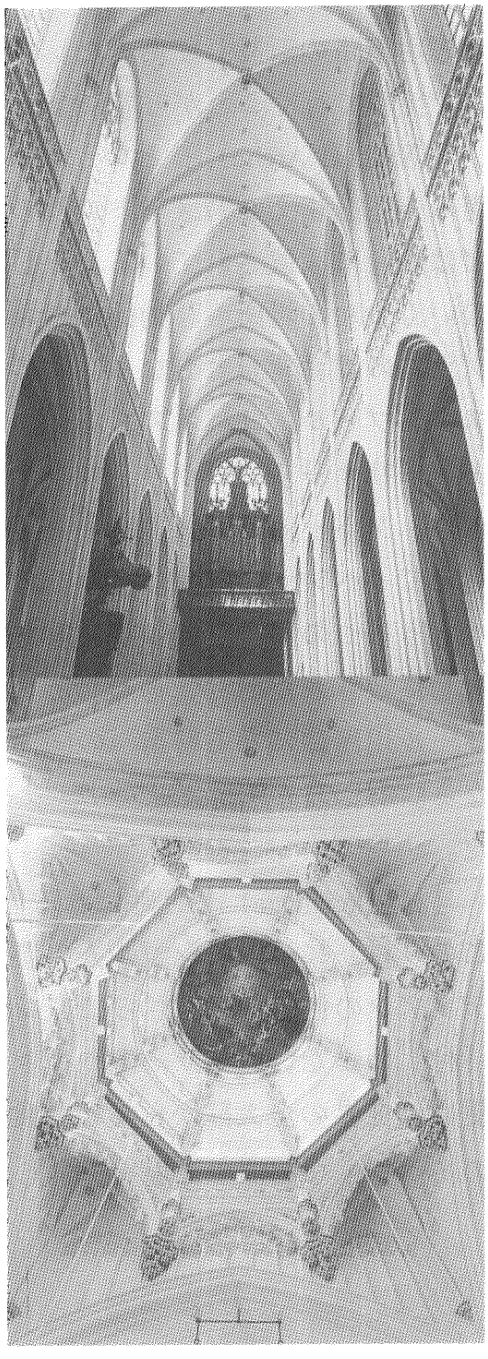
アントワープ中央駅内部



ブルラ劇場外観と内部(写真「アントワープ1993年協会」提供)

ノートル・ダム大聖堂外観

ノートル・ダム大聖堂内部・天井



（写真「アントワープ1993年協会」提供）

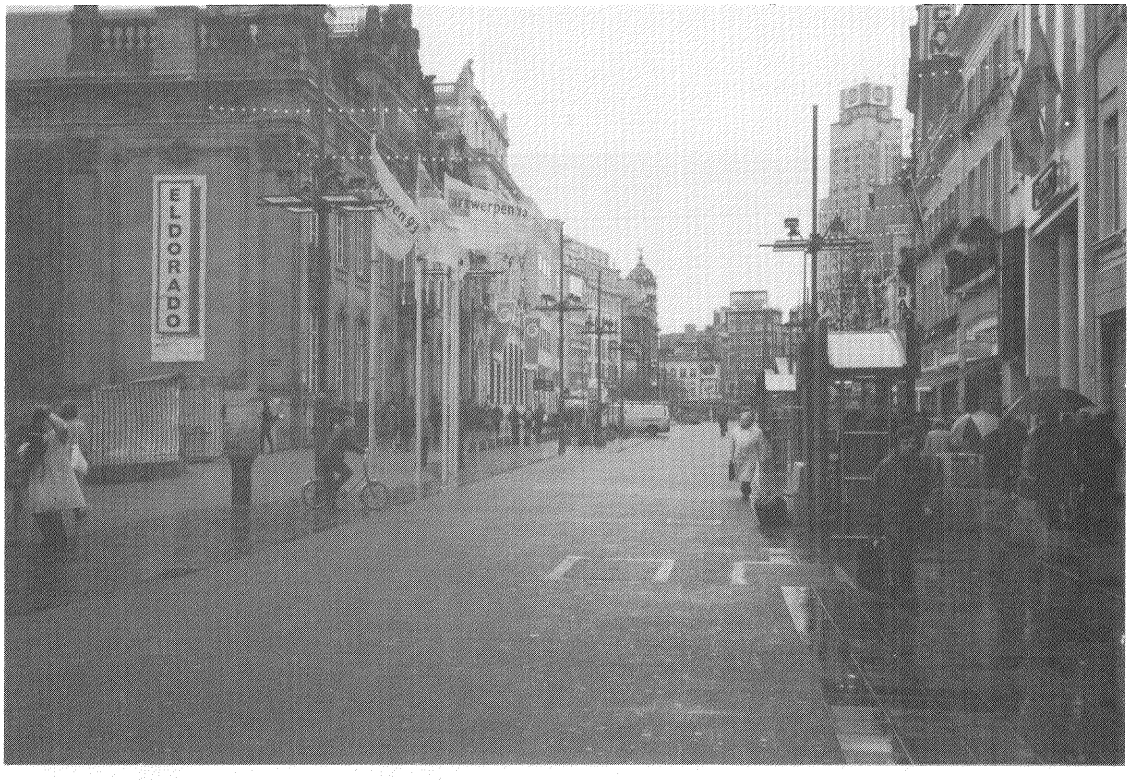
B　施設整備

大いに市民の好評を博したのは、「建物の汚れ落としや化粧直し」、そして「歩行者専用街路の新設」であった。メール大通りの歩行者専用化によって、駅から旧市街まで徒歩で行くことが可能になった。

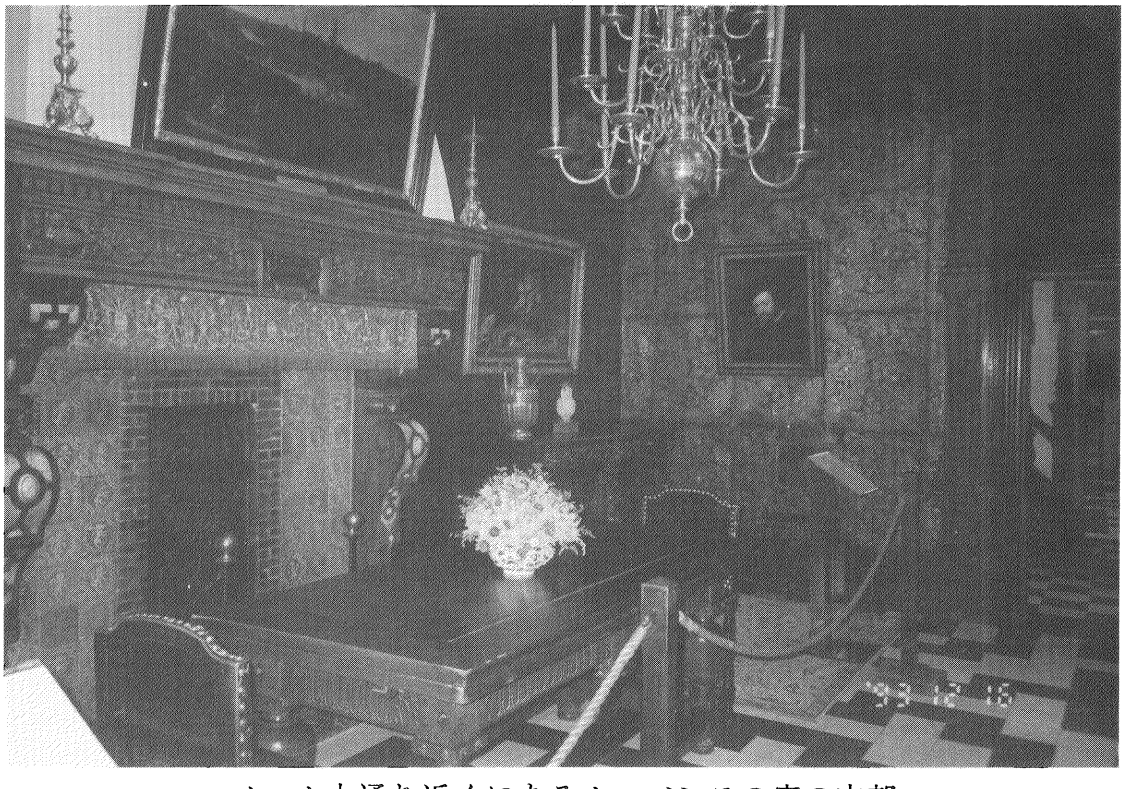
「箱船（l' Arche）」というのは、200人収容の劇場とレストラン喫茶、及び出演者用の楽屋を備えた77メートル長の川船である。調理室や衛生設備、劇場の技術部門などは船倉に設置されている。そして、「欧州文化都市」開催中には、「箱船」が市中のいくつかの場所へ移動係留された。「箱船」の移動係留は、イベントの中心的プログラムの舞台背景ともなり、世界の14都市の（バルセロナ、ブダペスト、ヘント、イスタンブール、ヨハネスブルク、リューブリアーナ 、ロスアンジェルス、マルセーユ、モントリオール、プラハ、ロッテルダム、サンクト・ペテルブルグ（旧レニングラード）、ストックホルム）から招かれた有能な芸術家達は、1週間この「箱船」に泊り込んでイベントに出演したのであった。

もう一つの同様な試みが「貨物船（le Cargo）」であって、これもアントワープへ回航し係留された。「貨物船」というのは、大型貨物船の船倉にナント（フランスのロワール川河口にある都市）の国ぶり豊かな街路を再現したもので、その街路が舞台となる。8月の1ヵ月間、王立リュックス劇団 がこの「貨物船」で公演して観衆を魅了した。

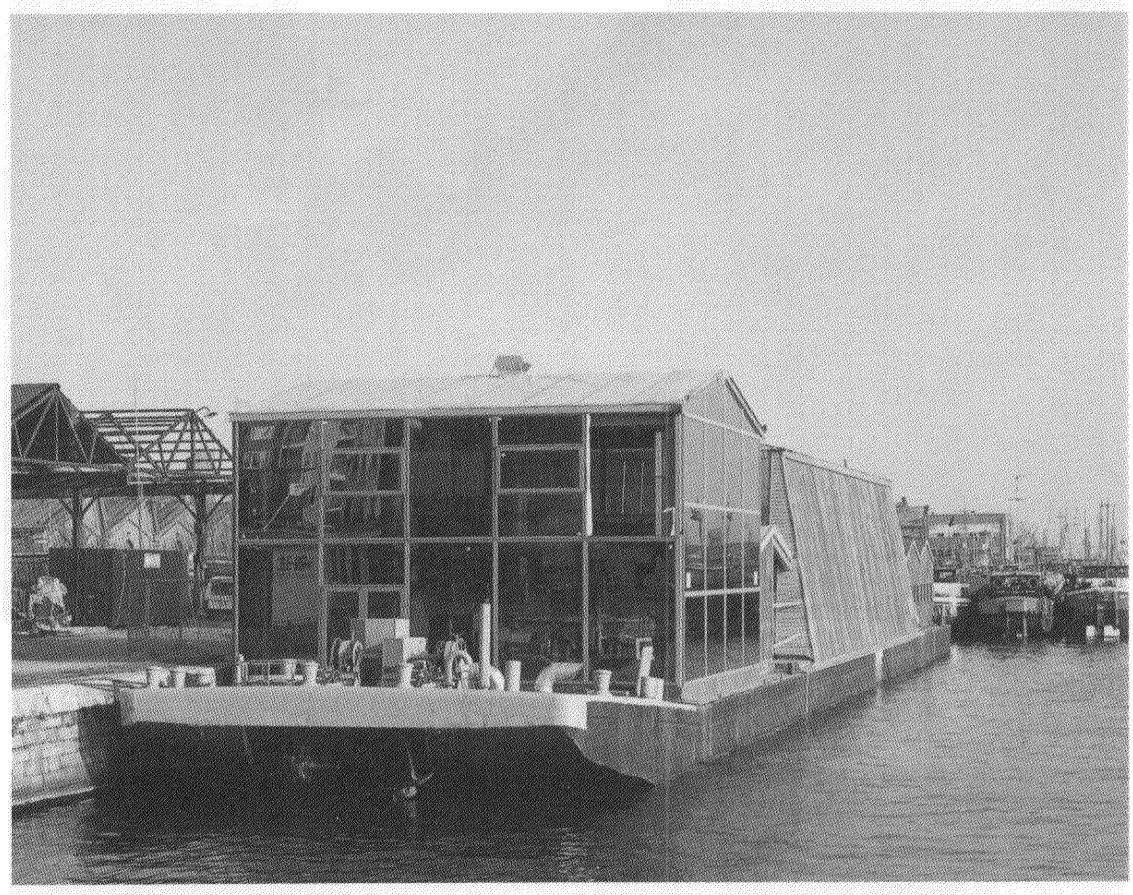
「村（le village）」と呼ばれる仮設の建物が、古来の手作りの手法で作られた。
この「村」には、モンゴル人の遊牧テント群から成る生活キャンプや、北米平原インディアンの住居テペ、さらにアルジェリアのベルベル人のテントなどが展示された。
「村」はまた、コンサートや種々のグループ活動、芸術家の制作活動、舞踏の公演、更には世界の全大陸から集めた食べ物、飲み物の試飲食会など、ありとあらゆる種類のイベントを開催する場を提供した。



メール大通りの新設歩行者専用街路



メール大通り近くにあるルーベンスの家の内部



「箱船」の遠景と近景（写真「アントワープ1993年協会提供」）

第２節　開催イベント

アントワープの「欧州文化都市」で開催された全てのイベントに共通するテーマには、次の3つの基本テーマがあり、それは第1に歴史、次に欧州文化の現在におけるダイナミズムの主な局面、そして最後にその未来の展望というものであった。ここで、その開催イベント全てを紹介するのは困難なので、展示・展覧会（１）、公演（２）、シンポジウム（３）の中から、最も人気の高かったものを以下に取り上げ、最後に日本からの参加者によるイベントを簡単に紹介する（４）。

１　展示・展覧会

種々の歴史展覧会は、他と比較し最も人気の高い催しであった。現代美術展が3万人の入場者数であったのに対し、修復成ったノートル・ダム大聖堂でのアントワープ派聖壇画展は50万人が訪れた。ただし現代美術展への来訪者数が少なかったことについては、あくまでイベントの多様性が目的であったことから、否定的な評価はなされていない。

展示・展覧会には、「アントワープ1993年協会」によって開催されたものから、私的に開催されたものまであったが、いずれもが、あくまで「欧州文化都市」の通年開催という枠の中で行われた。

最も反響の大きかったものとして、次のような展示・展覧会を挙げることができる。—「アントワープ、ある世界都市の物語（16—17世紀）」と題された展示会は、16—17世紀の欧州でアントワープが占めた重要な位置を明らかにするものである。「ヤーコブ・ヨーアルデンス展」は、バロック期のオランダ南部で最も人気の高かったこの画家の作品を集めた展覧会である。「ルーベンスの仕事場（ Rubens Cantoor ）」と題されたのは、ルーベンス旧宅内に再現されたアトリエの展示であった。「万国博覧会1885年、1894年、1930年」というのは、それぞれの年度に行われた万博でのアントワープをテーマとする展示を回顧するものであり、「精霊の顔（Le visage des esprits）」とはザイールの民俗行事で使われるマスク（面）を集めた展覧会であった。更に重要なものを列挙すれば、「若きピテル・ブリューゲルと老ピテル・ブリューゲルの絵画展」「写真で見る1993年のアントワープ」「若き英雄たち—現代の写真」「ゴシック期の私宝」などがあり、ファッションや銀細工、ダイヤモンドなどをテーマにした展示会も行われた。

諸々の美術・博物館も、「欧州文化都市」を好機として、変身を行った。その一つがミッデルヘイム美術館であって、その野外展示を模様替えするとともに、「ミッデルヘイム新彫刻展」と題して新収蔵作品の展示を行った。

更に万人に開かれた公開討論会場フォーラムが設定されて、討論と研究の場を提供した。アントワープはまた、欧州の文学と知的世界にも貢献すべく、一種の文学雑誌「評論」を、数言語で発刊した。

最後になったが、映画、写真、ニューメディア芸術なども、「映像センター」において数々の展示会を活発に開催した。

2　公演

アントワープで行われた多種多様な公演の中には、多くの創作が含まれていた。1993年3月26日金曜日の開会式では、ルク・ブレヴェーエイス作曲の「ターリスケア」をレオ・アウデーリツ指揮のモルス・パーカッション・アンサンブルとクラリネット合奏団が演奏した。

コンサートは、4つの異なるテーマで行われた。一つは、もっぱら「中世後期とルネッサンス期のフランドル・ポリフォニー音楽」を扱う一連のコンサートで、サンクト・アウギュスティーオン教会がその主要会場となったが、フランドル・バロック音楽の専門家たちは、旧市街の史跡や歴史的建造物を舞台に演奏会を繰り広げた。二つ目の部類に属するコンサートは、「19世紀中葉から1914年までのヨーロッパ音楽」を軸としたが、そこでは若くて大胆な現代音楽の作曲家たちと、ルネッサンス期及びロマン主義期の作曲家たちとの間の対話とでも言うべきものが展開された。三つ目のコンサート群は、「ベルギーへの移住者たちの音楽」を取扱い、スペイン・アンダルシーアやモロッコ、トルコ、インド、インドネシアなどへの音楽の旅が催された。そして四つ目として、「室内楽」が名誉ある地位を与えられた。それは、アントワープが自らの姿について思い描いているイメージを存分に示すもので、25のアントワープの名家が、それぞれの邸宅を提供して、コンサートを開いたのである。

クラシック・バレエとモダン・ダンスの公演は、劇場を使用して組織された。「欧州文化首都アントワープ'93」のために特に作曲された複数の新作オペラも上演された。そして劇場では、新作の演劇公演が行われる一方で、古典演劇が斬新な演出で演じられた。そればかりか、「8才未満の芸術」と称する演劇運動グループは、幼い子供達のための演劇公演を実施した。

1週間にわたり映画祭も行われ、数多くの作品が上映された。最後になったが、ツィンガロが創始した馬術スペクタクルなど、大衆的な催しも開催されて、多くの観客を集めた。

3　シンポジウム

アントワープでは、多くのシンポジウムが行われたが、中でも注目を集めたのは、「欧州都市における少数民族（16—20世紀）」と題したもので、これには欧州評議会の他、英国文化協会やゲーテ協会、アリアンス・フランセーズなどの組織が参加した。

アントワープ市は多くの欧州諸国のみならず、海の向こうにあるアメリカ合衆国その他の国々からも、シンポジウムのための発言者を招待した。多くのシンポジウムの中からいくつかを挙げれば、次のようなものがあった—「機能的都市？」「開かれた都市へ向けて」「世界市民それとも『白い肌の小心者』？」「複合文化の社会」など。以上の他、複数の講師による「欧州都市計画のビジョン」と題する講演会も開かれた。

4　日本からの参加者によるイベント

6月10日から19日には、日本の各分野のプロフェッショナルの参加による「ECジャパンフェスト」として次の6つのイベント行われた。①「ビジュアル・テクノロジーアート展」、②「スーパー・リアリズムエキシビジョン」、③「現代音楽の夕べ」、④「現代舞踊」、⑤「EC・ジャパンデー」における江戸花火、和太鼓、ジャズピアノ演奏、⑥「東西の文化と共通の価値」などをテーマにした「文化交流シンポジウム」であった。

11月20日から11月26日までは、「アントワープジャパンウィーク」として日本の16都府県の40を越す団体から約700名の参加を得て行われた。内容的には、茶道、華道、友禅、凧揚げ、ちぎり絵、焼物、舞踊、太鼓、琴演奏、居合術、七夕、物産展など今も日本各地の郷土に息づく多種多様な伝統的文化、工芸、芸能、音楽、武道、祭りなどが紹介された。

第3節　財政

アントワープで「欧州文化都市」が開催される3年前に、推定予算が作成された（1）。「アントワープ1993年協会」は、公共機関から出る資金の不足を補うため、多くの公共団体や企業を回って資金集めを行った（2）。

1　予算

「アントワープ1993年」の予算額は9億ベルギー・フラン（約27億円、1ベルギー・フラン=3円換算、以下同様）に上る。この予算額は、アムステルダム及びダブリンで

の「欧州文化都市」よりも大きいが、グラスゴー及びマドリッドでの予算額よりかなり少ない。総予算9億ベルギー・フランの内、6億7500万ベルギー・フラン（約20億2500万円）がイベント開催のための出費である。修復工事に費やされた金額は、この予算に含まれていない。

2　多様な資金分担

A　公共機関

「アントワープ1993年」の総予算額のほぼ3分の2、すなわち約6億ベルギー・フラン（約18億円）が、種々の公共機関による分担金である。

まず最初に挙げなければならないのがアントワープ市であって、上記予算額の内、少なくとも1億2500万ベルギー・フラン（約3億7500万円）を分担するとともに、人的援助の他かなりの金額に上る物的支援を行った。

フランドル自治州は総額4億9500万ベルギー・フラン（約14億8500万）を提供したが、これはイベント開催前の4年間と1993年の5年に分割された。ただし、自治州提供金額の内1億6500万ベルギー・フラン（約4億9500万円）はイベント予算であるが、残りの3億3000万ベルギー・フラン（約9億9000万円）は修復工事のためのものであって、イベント予算として使用することのできないものであった。

フランドル自治州は、最初の1989年に、2百万ベルギー・フラン（約6百万円）の財政援助を行い、その後、1991年から1992年の期間においては、総額2億ベルギー・フラン（約6億円）に上る財政援助を行った。

ECは「欧州文化首都アントワープ‘93」開催のために12万ECU（約1440万円、1ECU=120円換算）の助成金を供与した。この金額は、通常「欧州文化都市」に提供されている金額を下回り、ECが財政面でこの催しから徐々に手を引こうとしていることが窺える。ただし、イベントの内、ECが開催に直接関わったいくつかのプログラムについては、助成金に含まない財政援助を提供した。

諸外国の大使館、領事館、文化機関なども、コンクールの提供や財政援助を行って貢献した。

B　スポンサー募集

予算額の3分の1、すなわち3億ベルギー・フランは、スポンサーから得なければならなかった。そこで行事を開催する「アントワープ1993年協会」は、スポンサーの提供金額に応じる3つの選択肢を準備した。

イベント全体に参加する最も重要なスポンサーは「組織的スポンサー（sponsors structurels）」と呼ばれ、「アントワープ1993年」の主要なパートナーとなった。1991年9月から1994年6月に至るイベントの全てに関わるのは、このスポンサーだけである。このスポンサーは、3年間にわたって、イベント計画の作成と実現の全体に関わり、1993年に引き続いて1994年にも更に、スポンサーとしての利益を獲得できるという仕組である。この「組織的スポンサー」となるには、現金で1500万ベルギー・フラン（約4500万円）を提供するか、3000万ベルギー・フラン相当の現物を提供しなければならない。これに応じた10企業は次のとおりである。—ASLK-CGER銀行・保険会社、エレクトラベル電機、ゼネラル・モーター・コンティネンタル自動車、IBM、インタービルド社、ベルギー国鉄、ノールト・ナーティ社、ペトロフィーナー石油、R.T.T.社、デリニ・ベルガーコム社—。これらの企業の全てが、1500万ベルギー・フラン（約4500万円）の現金、もしくは3000万ベルギー・フラン相当の現物を提供するか、あるいは現金と現物の組合せで条件を満たした。他方、他の企業は450万ベルギー・フランの現金もしくは900万ベルギー・フランの現物を提供して、「組織的スポンサー」ではなく、単なる「スポンサー」になることも可能であった。

「アントワープ1993年協会」は、単一もしくはいくつかの特定企画にのみ参加し、イベント全体には関わらないことを希望する企業にも門戸を開いた。この種のスポンサーが、一つないし特定の複数企画にはっきりした形で参加するための条件は、企画によって異なっていた。また、しばしば、ある特定の一つの企画に、いくつかの共同スポンサーが付くということもあった。これら特定企画にのみ参加したスポンサーは約70企業である。

更にもう一つ、企画を支援したいと願う全ての個人や企業、公共機関が、10万ベルギー・フランから100万ベルギー・フラン程度の寄付をする場合の受け皿として「芸術基金（fond des arts）」も創設された。

上に述べたスポンサー企業には全て、「アントワープ1993年」に参加するそれぞれ独自の動機があった。他方で、「アントワープ1993年」側も、スポンサーのそれぞれが、最も適した方法で参加できるよう工夫し、スポンサーには金品の提供と交換に利益の提供が行われた。例えば、「アントワープ　1993年」が、ベルギー国鉄とともに「アントワープ　1993年－列車で行くのが快適！（Antwerpen 93:en train c'est mieux!）」という宣伝を行ったのもその一例である。イベントに国鉄の名前を前面に出すより、このような宣伝の方が効果的であることは明らかであろう。